

75%である。しかるに勉強の時間をみると、高松では一日三〇分―一時間が58%、一・五時間ないし二時間が22%であるのに対して、八ヶ岳では一・五時間―二時間が35%、二・五時間―三時間が23%、三・五時間以上が25%にもなっている。

(3) 新聞のどこを読むかについては、両者ともスポーツが最大であるが、マンガについては高松が八ヶ岳の二倍もあり、国際問題、政治面については、八ヶ岳がうんと高い。

要するに片方は勤勉努力的で、地味で、社会国際問題に関心があ
るものが多いのに対して、他方は心持ちが軽く、勉強もほどほどで
マンガを楽しんでいる少年像を提起している。八ヶ岳では社会党支
持が多く、高松では自民党びいきである。

(4) 「何が一番欲しいか」に対しては、両者ともテレビが第一、
第二がお金。そのあとは旅行、映画館、本などが大いになく、両地
ともほとんど同じである。

(5) 「東京をどう思うか」について「おもしろいところ」「働い
てうんとお金があるところ」では大いにないか、「おそろしいと
ころ」でも八ヶ岳が多く、「東京の人はいくらやましい」では高松が多
い。前述の項目同様、両地域の子どもをよく示しているものと思ふ。

農村児童の知的発達

児 玉 省
日本女子大学 亀 田 紀 子

高 神 弘 子

対象農村は前演者と同一。子どもは二才―六才の就学前児童各約

一五〇名である。本研究は、三年前日本保育学会が日本の幼児の発
達について標準化して、基準を使用して、両農村児童の知的発達を
東京および全国平均と比較検討しようとしたものである。

(1) ことば関係「かなで書いて自分の名前がよめる」では八ヶ岳
が最高(四七・五%)で、全国平均(三八・九%)より高く、高松
が(三一・一%)で一歩低い。「かなで自分の名前が書ける」でも
同様である。「花の名が言える」では、東京が最高、それから八ヶ
岳、高松の順。「住所、年令が言える」では、東京が一番高いが、
全国平均その他ほとんど差がない。

(2) 数字関係「とばさずに五つまで言える」では高松がやや高
いが、「……二〇まで言える」では八ヶ岳の方が高い。「指しなが
ら数える」でも同じような結果かでている。また指の数および(1
+1+2)の簡単な計算では八ヶ岳が高い。

(3) 位置および時間関係「左右、たてよこの区別ができる」「今
日明日の区別ができる」では八ヶ岳が高く、あと全国平均、東京、
高松はほとんど同じ。ただし「自他のものの区別」では東京、高松、
八ヶ岳の順である。

(4) 性別差、色の知識など 自分が男か女か分かるについては高
松が(一〇〇%)で最高で、あと全国、東京、八ヶ岳は差がない。
「お金をみせて何円か言える」では、全国平均が(七二・八%)で
最高、それから東京、高松、八ヶ岳の順であるが、あとの三者間には
ほとんど差がない。

(5) 運動的機能 「はさみで紙がきれる」では全国、高松、八ヶ岳
同一。「ボタンがとめられる」「ひもを片結びにできる」では、両農村と
も全国平均よりかなり低い。「三輪車にのれる」「ブランコをこげる」
など多少施設的なものについては全国平均が両農村より高い。しか

るに、「図形をまねてかける」「片眼だけつぶれる」では八ヶ岳が最高で、あと全国平均と高松が同一。「爪先立ちで歩ける」では八ヶ岳(八九・六%)が最高で、全国平均これにつき、高松はだいぶ低い。

多少考察を加えると、(1)農村児童は、全国平均または東京と比べ必ずしもその発達がおくれていない。(2)寒冷地の恵まれない農村地域の子どもが必ずしも温暖地帯の子どもにおくれていないばかりか、しばしばいい発達を示している。位置関係については、上下、高低のある地形の子どもが、左右、たてよこを早く知り、毎日日出・日没を見ている子どもが、今日・明日を早く知り、簡単な住所名である八ヶ岳の子どもが早く住所をおぼえるなど、恵まれない生活環境がかえってプラスに作用しているものを見出す。(3)このことは運動機能についても言える。施設的なブランコなど除いて「爪先立ち」「片眼つぶり」「図形かき」でも八ヶ岳の子どもが優位を示している。片眼つぶりや図形のかきは別とするも、爪先立ち歩きなどは、ほとんどできるところ坂道のある八ヶ岳の子どもが早く発達することもあるいは地形に関係があるかもしれない。(4)数についても八ヶ岳の子どもが多少早いのは、結局總体的に発達一般がおそくないこととしらしてあると思う。(5)ただし、幼児期の発達が早いとおそいとかいうことは、その後青年期までその発達をそのまま持ちつづけることを保証するものでない。

集団保育と遊戯治療

西南学院大学大部 高橋 さやか

Play-therapy は、通常、精神分析的な立場から個別におこなわ

れる場合が多いようである。group-therapy とよばれる方法も、そのグループは大体において治療をうける者たちを成員とする場合が多いようであって、要は、問題をもつ人間を、個別的に扱い、抑圧解放なり、カタルシスなりの成功によって、正常な自我を再び確立させようとするのであると理解してよいのであろう。

集団保育の場である幼稚園・保育園において、遊戯治療は、必ずしも簡単に実践することが容易でない。ひとりの子どもだけに徹底して遊戯の条件を与えかつ見守ることは、集団保育の場では困難である。しかしながら、集団保育の場において、遊戯治療に近似した成果を見ることは、しばしば保育者にとって経験されるところである。

反復言語、常同症、無感動、無反応というようなあらわれをもち自閉症かと疑われる四才(三か月)児 T・A が、五才三か月を迎えるまでの約一年間の経過を見ても、とくに園側で積極的な遊戯治療というほどのことを実践したわけではなかったけれども、両親へのカウンセリングと、本人をできるだけ干渉せず、やれ距離を保つてなるべく本人に気づかれぬように見守るなどの措置によって、除々に無感動無反応の状態からともかくにも脱け出したのは事実であって、精神医学の専門家からもかなり著しい「治療効果」をみとめられた。

集団に対応しようとする子どもの自我のうごきについて、私たちはもっと追求すべき点が多々あると考える。T・A は集団に参加することは一年のごく終りに近づくまでできなかったが、不可視的な内面生活では、自己の周辺にある集団の活動に対応していたことしか考えられない。保育生活における遊戯治療は、従来とられていた方式とは別個に、新しい分野がひらかれるべきでないかと考える。